



恩納部落を焼き払いながら進攻する米軍

村の南側に位置する仲泊以南の集落に避難していた住民は、米軍の北部進攻とほぼ同時に収容され、いち早く戦後の生活に入るが、恩納岳に避難した住民は長い人で、約4か月恩納岳を逃げ回ることになった。

米軍につかまるとひどい目に合うという情報を信じこんでいた住民は、容易に米軍の投降の呼びかけに応じることはなかった。

恩納岳に本部を置く第二護郷隊は上陸後の米軍進攻を妨害するため、村内にかかる橋を爆破していった。しかし、上陸前にあっただけの食糧、生活必需品を持って沖縄島北部へ避難する住民は渡り切れず、泣く泣く手前で食糧を捨て、限られた荷物だけで移動せざるを得なくなった。このことが避難先での栄養失調、飢餓へつながることになった。壊された橋は一時的に進攻を阻んだものの、米軍はすぐに橋を修復し、米軍の作戦に大きな影響は出なかった。

第二護郷隊は恩納村に陣地、基地を拡大する米軍ヘゲリラ戦を行うものの、次第に戦線を寸断され、5月末から米軍の猛攻を受け、死傷者が続出した。南北への移動が完全に寸断され、米軍に四方から追い詰められ、蓄えていた食糧も尽きていく中、第二護郷隊は6月2日に恩納岳から撤退した。負傷して動けない患者はそのまま放置、もしくはその場で銃殺された隊員もいた。

嘉手納の中飛行場、読谷の北飛行場から移動してきた特設第一連隊の隊員にも多くの戦死者が出た。その後、沖縄島北部での遊撃戦へ移行するために生き残った隊員が東村有銘まで移動するが、7月16

平和の礎に刻銘された戦没者の字別一覧 (2020年6月現在)

字	戦没者数	備考
名嘉真	130	
喜瀬武原	52	
安富祖	105	
瀬良垣	89	瀬良垣地番の太田含む
恩納	359	恩納地番の太田、南恩納含む
谷茶	115	
富着	48	
前兼久	82	
仲泊	142	
山田	195	
真栄田	156	真栄田地番の塩屋、宇加地含む
合計	1,473	※1

※1 1931年の満州事変に始まる15年戦争の期間中に戦争が原因で亡くなった人、戦争が原因で戦後亡くなった人

日、岩波隊長から解散を命じられる。しかし、この解散は命令から解かれることなく、故郷で命令があれば米軍への反攻をいつでもできるように準備をし、待機しておくことであった。(1月号へつづく)(瀬戸)

参考文献・参考史料

- ◇字恩納自治会「恩納字誌」2007年
- ◇恩納村「恩納村誌」1980年
- ◇恩納村「恩納村誌 第一巻 自然編」2014年
- ◇広報おんな 2016年・2018年
- ◇恩納村遺族会「恩納村民の戦時物語」2003年
- ◇恩納村博物館紀要第10号(2018年)・第11号(2020年)
- ◇高島勇之助「霞城連隊の最後」1974年
- ◇防衛庁防衛研修所「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」1968年
- ◇林博史「沖縄戦が問うもの」2010年
- ◇三上智恵「証言 沖縄スパイ戦史」2020年